『御堂関白集』読解考

――第三歌群・年次不定詠の部（承前）――

妹尾好信

はじめに

『御堂関白集』は七十三首の歌とそれに続く一首の詞書から成る小歌集だが、構造上三つの歌群に分けられることが杉谷寿郎氏によって明らかにされている（「御堂関白集の性格」『言語と文芸』第二十九号（昭38・9）、『平安私家集研究』（平10　新典社）所収）。すなわち、次の三群である。

（1）第一歌群…寛弘元年詠（1～25番歌）　二十五首
（2）第二歌群…寛弘二年詠（26～46番歌）　二十一首
（3）第三歌群…年次不定詠（47～73番歌）　二十七首（他に詞書のみ一首）

筆者は昨年来、いまだ注釈的研究がほとんど進んでいないこの集の読解を試みている。それらは、次のように分載して発表してきた。

①『御堂関白集』読解考――第一歌群・寛弘元年詠の部――『国文学研究資料館紀要』第二十六号（平12・3）
②『御堂関白集』読解考――第二歌群・寛弘二年詠の部――『広島大学文学部紀要』第五十九巻（平11・12）
③『御堂関白集』読解考――第二歌群・寛弘二年詠の部（承前）――『古代中世国文学』第十四号（平11・12）
④『御堂関白集』読解考――第三歌群・年次不定詠の部――『広島大学文学部紀要』第六十巻（平12・12）

本稿は、紙数の制限により途中で打ち切らざるを得なかった前稿④に引き続いて、第三歌群のうち、最後の三首（71番歌～73番歌）とそれに続く詞書の読解を行ない、第三歌群の歌の性格についてのまとめをする。節番号は前稿④に続くものである。まず前稿④からお読みいただければ幸いである。

引用本文の底本や校訂の方針は前稿①～③に記している。

一三

内侍の督の殿に、朝顔のまだ露置きながらに、いとと
う

【71】置(き)つらむ露の気色もゆかしさによそへ知るらむ今朝の朝
顔

御返(り)

【72】今朝ばかりよそへ知るらむ朝顔の暮れなばいとど頼まれぬか
な

内侍の督の殿（藤原妍子）に、朝顔の花にまだ露が置いたままで、とても早くに、（春宮が）

朝露が置く時間に起きただろうあなたの様子が知りたいものですが、（私の方がどうかというと）この露の置いた朝顔の花によそえて、（あなたと別れた悲しみの）涙に泣き濡れた今朝の私の顔をあなたは知ることができるでしょう。

ご返事

確かに、今朝ばかりは、この露の置いた朝顔の花によそえてあなたの今朝のお顔は知ることができるでしょう。でも、朝顔は夕方までももたないはかない花です。あなたのお心もこの朝顔のように変わりやすいのではないかと、今日の日暮れになるとまたいらして下さるかどうか、ますます頼りにできない気持ちがいたします。

「内侍の督の殿」は、道長の次女妍子。45・49・51・57番歌の詞書に既出。寛弘元年（一〇〇四）十一月二十七日任尚侍（『御堂関白記』）、同七年（一〇一〇）二月二十日春宮居貞親王（三条天皇）に入内（『日本紀略』『権記』）、翌八年（一〇一一）八月二十三日女御宣旨（『日本紀略』『御堂関白記』）。

杉谷寿郎氏は、71番歌を道長、72番歌を妍子の詠としておられるので、道長が、ある秋の早朝、露の置いた朝顔の花を娘の妍子に歌を付けて贈り、妍子がそれに返歌したというふうに考えておられるようである。それも一解であるが、最近、平野由紀子氏がこの贈答歌について示された解釈（「御堂関白集より」『むらさき』第三十六輯（平11・12））は実に明快である。氏は、次のように説かれる。

71番歌の初句「置(き)つらむ」には、露が置く意の他に「起きつらむ」すなわち朝起きる意が掛けられており、共寝の翌朝の歌と想定される。したがって上の句は、「別れて帰った後、離れた所にいる相手の朝の様子を思いやり、どのようであるか知りたい」という意になる。つまり、この二首は後朝の贈答であって、「七一の贈歌は春宮（居貞親王）からのもので、七二の返歌は妍子ということになる」。そして、「詞書の末尾の『いとゝう』は、単なる『朝早く』の意だけではなく、帰るなりこの文を使いの者に持たせた、という愛情の深さを示すものであって、『後朝の文』の来る『速さ』をいったと解せる。そこには、女房である詞書の書き手の『誇らしさ』、春宮の寵愛をうける方に仕える喜びさえ感じられるのである」と、見事な鑑賞をなされた。この平野氏の読解に付け加えることは何もない。

同時代の詠歌の中で、朝顔の花を人に贈った例としては、平野氏も挙げられた『拾遺集』巻二十・哀傷・一二八三の、

あさがほの花を人のもとにつかはすとて　藤原道信朝臣

あさがほを何はかなしと思ひけん人をも花はさこそ見るらめ

が有名であるが、このように朝顔にはかないもの、頼りないものの意をこめて贈った例は、他に『紫式部集』四～五（＝『続拾遺集』

巻十四・恋四・一〇〇二～一〇〇三）に、

かたたがへにわたりたる人の、なまおぼおぼしきことありて、かへりにけるつとめて、あさがほの花をやるとて

おぼつかなそれかあらぬかあけぐれのそらおぼれするあさがほの花

返し、てをみわかぬにやありけん

いづれぞといろわくほどにあさがほのあるかなきかになるぞわびしき

とある贈答や、同集五二（＝巻十七・雑四・二三九一）の、

世中のさわがしきころ、あさがほを人のもとへやるとて、

きえぬまの身をもしるしるあさがほのつゆとあらそふ世をなげくかな

という紫式部の歌、また『和泉式部続集』二六四の、

くれにかならずといひたるをとこ(に)、あさがほにつけていまのまのつゆにかばかりあらそへばくれにはみえじ朝がほのはな　（※括弧内は誤脱と見て補った）

などがある。『和泉式部続集』の例は、今日の夕暮までは自分の命が持たないと言っているのであるが、後朝に詠まれた歌である点で72番歌と共通点がある。

詠作年時については、平野氏が、「この贈答は、春宮居貞親王と妍子という夫妻の間に交わされた、ある秋の早朝の後朝の歌と考えておく。妍子の呼称から、女御になる前、すなわち、寛弘七年二月二十日以降、寛弘八年八月二十三日までの時期のものであろう」と説かれたのでよいであろう。すなわち、寛弘七年（一〇一〇）か翌八年（一〇一一）いずれかの七月の詠である。

一四

傅の殿、若宮の御雛屋に、さまざまの物植ゑなどして、山の上に神の社あり、童に幣持たせて、それにかかる

【73】君が世に天降りける神なれば千歳の松の中にこそ斎へ

御返し、殿おはしますほど、やがて

ヤノマ、

訳　傅の殿（藤原道綱）が、若宮のための御雛屋に、さまざまな植物を植えなどして、山の上に神の社がある、そこに童の人形を置き、幣を持たせて、その幣に書かれた歌、

若宮のお生まれになったこの世に天降った神なので、こうして（若宮のご長命をお祈りして）千歳の松の林の中に斎き祭っております。

ご返事は、殿（道長）がいらっしゃるところだったので、すぐに、

（和歌欠）

「傅の殿」は、67番歌の「傅の大納言」と同じく藤原道綱のこと（67番歌詞書と同様、底本とした松平文庫本には「ふのとの」の「ふ」の字の右に「かる歟」と傍書しており、また「尚のとの」とする伝本があるが、いずれも変体仮名「ふ(布)」を誤読したものと見られる）。道綱の春宮傅在任は、寛弘四年（一〇〇七）正月二十八日から寛弘八年（一〇一一）六月十三日まで（『公卿補任』）だが、『栄花物語』巻十二・「たまのむらぎく」によれば、官を離れた後も「傅の殿」と呼ばれていたらしい。

「若宮」も53・55番歌に既出。敦成親王（後一条天皇、寛弘五年（一〇〇八）九月生）か敦良親王（後朱雀天皇、寛弘六年（一〇〇九）十一月生）のいずれかである。ともに母は中宮彰子、道長の孫にあたる。後掲『秋風集』の詞書によれば敦成親王であるが、確たる根拠があっての比定ではあるまい。

傅の殿道綱が若宮のために「御雛屋」を贈った。「雛屋」は65番歌の詞書にあった「雛屋」と同じく、雛人形を飾るためのミニチュアの家のことだが、ここは、単なる家だけではなく、木立から山まで配した大掛かりなものであったようだ。歌合などの晴儀の場や祝い事の席の装飾に用いられる洲浜のようなものなのであろう。『中務集』（西本願寺本）一一四番歌の詞書には「たなばたのゑの、中宮のひひなあそびに、かはらのかたすはまにつくれり」云々とあり、屏風絵の図柄だが、洲浜を作った雛遊びの道具があったことがわかる。ここは、洲浜の山の上に作った神社のそばに幣を持たせた童の人形を置き、その幣に73番の歌を書いてあったというのである。雛屋に神社を作るというのは、特別珍しい趣向ではなかったようで、『斎宮女御集』六〇～六二には次のようにある。

うちにおはせし時、ひひなあそびの、神の御もとにまうでたる女をとこまうであひて、物いひかはす

そのかみはさしもおもはでこしかどもおもふことこそことになりぬれ（六〇）

女、返し

神だにもいのることだにあるものをあだしおもひやいかがなるらん（六一）

おなじひひなやのやしろの前のかはに、もみぢちるところにて

かぜはやみかみのあたりをはらふともはやきせぜにもちるもみぢかな（六二）

ここでは、神社があって参詣する男女の人形が配置されており、その男女の会話という形で和歌が詠まれている。また、神社の前には川があり、紅葉が散りかかる様が作られているのだから、よほど精巧な造り物である。

73番歌は、千歳の松によそえて若宮の長寿と繁栄を祝ったものである。この詞書には表われないが、後掲『秋風集』の詞書のように、山の上の神社の周辺には松原が作られていたのであろう。

「若宮の雛屋に」とあるから、これは「若宮」のための雛遊びの道具

として道綱から贈られたものである。雛遊びは基本的に女の子の遊びと思われるので、先の65番歌の場合は「高松の君」が雛屋を贈った相手を幼い妹の嬉子あたりと想定したのだが、ここは「若宮」とあるから、男子である敦成親王か敦良親王と見なければならない。男の子であっても幼児は雛遊びをすることがあったのだろうし、これほど精密な雛屋であれば、実用的な遊び道具というよりは、装飾品としての性格が強かったのだろうと思われる。

さて、この雛屋が届いた時、ちょうど道長が居合わせたので、すぐに返歌をした、というのが歌の後の詞書だが、諸本ここでとぎれていて、道長の返歌を記さない（天理図書館蔵の伝源俊頼筆転写本だけは最後の詞書全体を欠いている）。あるいはこの詞書も途中で切れている可能性がある。現存諸伝本の共通祖本以前の段階で、74番目の歌以降が欠落してしまったものと思われる。

それでは、道長の返歌は知られないのかというと、実は、建長三年（一二五一）に藤原光俊（真観）が撰んだ『秋風集』の巻十・神祇・六二二～六二三に、次のような贈答として載っている。

後一条院いまだみこにおましましけるとき、たてまつりけるひなやまさまざまの木草などうゑて、やまのうへにまつばらあるに神のやしろいはひて、みてくらたてたりけるにかきつけて侍りける　皇太后宮大夫みちつな

君が代にあまくだりける神なれば千とせのまつにいはひこそすれ（六二二）

これをみ侍りてよみ侍りける　法成寺入道前摂政

あめのしたをさめてきたる神なれば君をたもてといのりこそませ（六二三）

これによって、欠落している道長の返歌が知られるのである。六二二番歌の詞書は、『御堂関白集』73番歌の詞書と比べるに、齟齬というべき相違はない。「若宮」が「後一条院」となっており、敦成親王と特定されているのは、特別な根拠があってのことではなく、単に「若宮」を二皇子のうち兄の敦成親王の方と理解しただけのことであろう。たとえば、やはり「若宮」の詠とする56番歌の作者を『続古今集』巻二十・賀・一八七五では「御朱雀院御歌」としているのと同様である。敦成親王である可能性は小さくないと思うが、『秋風集』の記事によってこの「若宮」を敦成親王のことと確定するわけにはいかない。「やまのうへにまつばらあるに」と松原の存在に言及している点、単に「みてくらたてたりけるに」とだけあって童の人形に幣を持たせたと書いていない点などは73番歌の詞書と異なるが、前者は歌の内容から容易に推測できるし、後者は単純化して記述した結果と考えることができよう。すると、この贈答は、当時存在していた『御堂関白集』をもとに採歌されたと考えてよいのではなかろうか。『秋風集』には他に、『御堂関白集』の9・10番歌（巻一・春上・四〇～四一）と35番歌（巻十五・離別・九九〇）を道長歌として載せ、24番歌（巻十七・雑上・一一二四）を倫子、44番歌（巻十七・雑上・一一二六）をあるじの歌として載せているが、いずれも詞

書の内容や歌句にさしたる齟齬はない。となると、光俊が見た、あるいは所持していた『御堂関白集』は、現存諸本のように七十三首とそれに続く詞書だけの不完全な形態ではなかった可能性が大きい。現存本のうち彰考館蔵甲本などいくつかの伝本に見られる本奥書には、嘉元二年(一三〇二)二月に鎌倉の旅宿で「藤谷殿」冷泉為相から見せられた「御堂大殿集」を書写したものである旨の某人の本奥書がある。その本は「故禅門」おそらく為相の父為家の代から所持していたものだが、本文に疑問箇所の多い本だという。これによれば、鎌倉中期の為家の時代にはすでに現存本のように損傷の多い形となって存在していたようなのだが、ほぼ同時代の光俊はより整った『御堂関白集』を見たということになる。光俊は反御子左家を標榜して活動した歌人であるから、御子左家伝来の本とは異なるよりすぐれた本を持っていたのであろうか。もっとも『秋風集』には道長の歌が全部で十首載り、現存『御堂関白集』に載らない歌が他に七首ある。それらは題しらず(一六二)であったり、『法花経』二十八品題の歌(五六七・五八一)であったり、現存『御堂関白集』に載る歌とは性格を異にする種類の歌も含まれているから、すべてが『御堂関白集』による採録とは言えないだろうと思う。しかしながら、実方の陸奥守赴任(長徳元年(九九五)正月任)に際して贈った歌(一〇五六)や、山里に住む清少納言に贈った歌(一一一七)などは、『御堂関白集』の中にあってもおかしくない種類の歌である。鎌倉中期頃までは、現存本よりも整った歌数の多い『御堂関白記』が存在した形跡を示す徴証と言えるかも知れない。

道長の返歌は、この山の上の社に祭られた神様は天下を治めてこられた神だから、若宮のことを長寿を保つようにと祈っておいでになることですよ、と道綱の贈歌の表現を素直に受けて、若宮の将来をことほいだものである。

詠作年時は、道綱の春宮傅在任中のことならば寛弘四年(一〇〇七)正月二十八日から同八年(一〇一一)六月十三日までの間のことなるが、敦成親王誕生以降であるから、寛弘五年(一〇〇八)九月十一日が上限である。季節順の配列の原則から言えば前歌と同じく秋のことであろうから、寛弘七年(一〇一〇)の秋が下限である。おそらく同年のことであろう。「若宮」が敦成親王であれば、道綱は春宮居貞親王(三条天皇)の傅であったが、その在任中に時期春宮予定者に立派な雛屋を贈ったことになる。弟道長への追従であろう。

おわりに

ここで、第三歌群のまとめをしておく。

杉谷寿郎氏は、三つの歌群の歌の配列を検討された結果、「各群は各一年の月次を追って排列されている」ことを発見され、第三歌群の二十七首が「『鶯』(47・48)、『あやめ』(57・58)『露』(71)と月次を追っている」にもかかわらず、「露すなわち秋で終っているのは、74が詞書のみで歌を欠いていることから知られるように、本集が全き姿を伝えていないためであって、編纂当初は春に始まり

冬に終る一年の月次の排列を持っていたのであろう」と推定された。そして、各群の歌の詠作年代を考証された結果、第一歌群は寛弘元年(一〇〇四)、第二歌群は翌寛弘二年(一〇〇五)の詠作ばかりであることをつきとめられた。第三歌群については、「確かな年次を示す歌は、一つも得られな」いものの、55・56番歌が若宮の御書き初めであるから、若宮(敦成親王または敦良親王)がまだ若年の頃のことであり、また49・50、51・52、57・58、71・72番歌において妍子が「尚侍」と呼ばれていることとその年齢を考え合わせると、「これらの歌は寛弘末年(七年、八年)から長和初年の交の歌ではないかと思われる」と考察されたが、第三歌群の歌は第一・第二歌群の歌と違って、「同一年次の歌ばかりであるとは今のところ言えない」とも言われている。そして、「『御堂関白集』は、もともと多年次の歌から成っていて、たまたま寛弘元・二年の歌が残り、それに寛弘・長和の交の詠草を集めた歌群が結びついて、現在見る型となったのではなかろうか」と結論された(以上、前掲「御堂関白集の性格」)。この杉谷氏の研究はほぼ認められていると言ってよく、平野由紀子氏も、前掲論文において杉谷説を妥当とされた上で、「寛弘元年、二年の部分がほぼ季節の順に歌を有しているのに、なぜ、三年四年五年六年の部分がなくて、寛弘末年の歌群になるのか。各年毎の歌群がもとはあったのに失われたのか」との疑問を提示しておられる。もっともな疑問である。しかしながら、今のところその答えは容易に出せそうにない。

ところで、森田奈々氏は、第三歌群は寛弘七年(一〇一〇)の詠草を月次順に配列したものであると主張された(「御堂関白集の基礎的研究」お茶の水女子大学『国文』第九十三号(平12・7))。氏は、第三群の歌の詠作年次と配列を検討されて、

①第三歌群のうち、51・52番歌は寛弘七年春の詠草である。

②第三歌群の人物呼称は寛弘六年三月から寛弘八年六月のものである。

③第三歌群の配列は、第一・第二歌群と同じように、同一年次の詠草を月次順に並べるという方法を採っている。

という三点を根拠に、「寛弘七年の詠草を月次順に配列しているのではないかという結論に至るのである」と述べておられる。しかし、これはいかがであろうか。51・52番歌を寛弘七年(一〇一〇)の詠作とすることは首肯できるが、他の大多数は寛弘七年の詠とは決められないものである。前稿④で述べたように、59・60番歌は、隆姫の父具平親王在世中の詠であるはずなので、寛弘六年(一〇〇九)のことでなければならない。逆に、55・56番歌は「若宮」の御書き初めの歌なので、寛弘七年(一〇一〇)では敦成親王三歳、敦良親王二歳となって、いかにも早過ぎるのである。また、63・64番歌もおそらくは一条天皇崩御後まもなくの寛弘八年(一〇一一)初秋頃に詠まれたと考えられるのである。森田氏の③は、月次順であることは前提として、それが同一年次のものであるかどうかがそもそも検討対象なのだから、根拠にはならない。

私見では、第三歌群は、寛弘六年(一〇〇九)から同八年(一〇一一)までの三年間の詠草を、年次は整えずに季節の順に並べたものであると考える。55・56番歌は寛弘八年でもやや早いという印象があるが、他の歌がすべて寛弘八年までに収まるので、杉谷氏の説かれた「寛弘末年(七年、八年)から長和初年の交」というのを一年ほど前にずらして、寛弘六年から八年までの詠と見なしたいのだが、いかがであろうか。ただし、なぜ第三歌群だけ三年間の歌をまとめて季節順に配列したのかは、どうにもわからない。

さて、『御堂関白集』の性格について、森田氏が、『枕草子』の日記的章段との類似を指摘され、「『御堂関白集』は、道長や彰子周辺の華やかな交流に視点を置き、寿ぎの歌を多く採る事によって道長家の栄華を伝えている。家集でありながら、歌そのものよりもむしろ、歌の詠まれた背景にある華やかな出来事を記録し、絶頂期の道長家の栄華を描く事を目的として編纂された日記記録的性格をもつ家集であると考えられるのである」と述べられた(前掲論文)のは、全くその通りと思う。第三歌群においては、特に、51・52、53・54、55・56、57・58、59・60、65・66、73・(74)と、祝意を表わし、または慶事に際して交わされた贈答歌が目立つのである。まさしく、歌で綴った御堂関白家の栄華物語とでも言うべきである。

ところで、『御堂関白集』の編者について、杉谷氏は、「本集は道長家の人々の詠歌、その私生活における交遊の記録であることが編纂目的と考えられ、またこれらの人々の詠草を集めた集であるから、道長近親、道長家女房などが、その編纂者であろうことは想像されてよいであろう」と述べられ、平野氏も、「確実にいえることは、紫式部の仕えた道長家に同じく宮仕えしていた女房の筆になるものである、ということである」と言われていることも納得のいくところである。ただし、道長家に仕えた一人の女房が独力で詠草を収集し編纂したというのではなく、道長家だけでなく、中宮彰子・尚侍妍子・北の方倫子・その母一条殿穆子ら、道長近親の人々に仕えた女房たちが広く詠歌資料を提供して編纂を助けたものと考えられる。第三歌群で言えば、59・60番歌は頼通またはその妻隆姫のもとから流れ出たものであるし、67・68番歌などは一条殿に仕える女房によって語られたものとしか思えない。平野氏の指摘されるごとく71・72番歌の詞書には妍子に近侍する女房の口吻が感じられる。もともとは長期間にわたる多数の詠草を年代順・季節順に配列した大きな歌集であった可能性を考えるとき、『御堂関白集』は、道長とその一族の人々が女房たちを使って合同して作り上げた一大家集(文字通りの「家の集」)であったと想像されるのである。もし、その散逸部分がどこかに埋もれていて、将来その全貌が明らかになったら、我々は『源氏物語』を生んだ平安王朝の最盛期に、政治的にも文化的にも中枢にいた人々の日々の暮らしぶりを、和歌のやりとりを通してその息遣いまでもリアルに眺めることができるかも知れないと思うと、まことに心ときめく気分になるのである。

――せのお・よしのぶ、広島大学文学部助教授――

歌群	区分	番号	歌	作者	出典	年月日
第一歌群		22	こゝにても風のけしきの…	（道長）		
		23	滝の音をいかにきくらむ…	花山院	玉葉・巻十六・雑三・二二三〇（花山院御製）	寛弘元年閏九月四日
		24	この葉散秋のけしきの…	（道長）	秋風集・巻十七・雑上・一一二四（従一位倫子）	
	一二	25	かひのくにつるの氷の…	経房？		寛弘元年十二月二十六日
第二歌群	一	26	君がためおのへの松を…	（道長家女房）		寛弘二年正月三日
		27	君がためねことにひける…	（彰子女房）		
	二	28	わたつ海に年ふる物は…	選子内親王		寛弘二年正月六日
	三	29	あしたづをなでおほしてし…	道長		寛弘二年正月～三月
	四	30	谷の戸をとぢや果ぬる…	（道長）	拾遺集・巻十六・雑春・一〇六四（左大臣） 金葉（三奏本）・巻九・雑上・五〇八（宇治入道前太政大臣） 千載・巻十七・雑中・一〇六一（法成寺入道前太政大臣） 玄々・一一 公任集・五二七 定家八代抄・巻十六・雑上・一四九二（法成寺入道摂政） 小右記・寛弘二年四月二日条（左府）	寛弘二年四月一日
		31	ゆきかへる春もしられず…	公任	拾遺集・巻十六・雑春・一〇六五（公任朝臣） 公任集・五二八 小右記・寛弘二年四月二日条（左金吾）	
	五	32	露わけて□さふける…	進の内侍		寛弘二年五月三日頃

第二歌群				
一一	46	こゝまでもゆきもかゝらで…	妍子	
	45	人をのみおもひやるまに…	（彰子）	
一〇	44	誰ぞこの昔をこふる…	（小家の主人）	秋風集・巻十七・雑上・一一二六（あるじ）
九	43	秋ふかき山の嵐を…	小少将の君	
	42	風のあらきけしきをみても…	彰子	寛弘二年九月
八	41	こゝばくの年をつみたる…	穆子	
	40	契りけむ昔うれしき…	彰子	
	39	昔より契しことも…	穆子	
	38	ひろまるも昔からこそ…	（彰子）	
	37	あなたうと法のひろまる…	道長	寛弘二年八月二十九日
七	36	程ふべき旅にはあらねど…	式部の御許	新千載・巻七・離別・七四二（紀式部）
	35	草枕旅の宿りの…	彰子	新千載・巻七・離別・七四二（後堀河太政大臣） 秋風集・巻十五・離別・九九〇（法成寺入道前摂政） 閑月・巻七・離別・三五一（法成寺入道前摂政）
六	34	匂ひうすきかきほの陰の…	公任	寛弘二年七月中旬？
	33	露ふかみちよをまかせし…	（道長家女房）	

第三歌群					
一	47	鶯の声せぬ春も…	選子内親王		某年初春
	48	うちなびき鶯さそふ…	（道長）		
二	49	はねなれし花のはなれど…	（道長）		寛弘七～八年の春
	50	おどろかす声なかりせば…	妍子		
三	51	我宿の花のころほひは…	穆子		寛弘七年二月下旬？
	52	のどけくて春のみやこと…	妍子		
四	53	梅がえにかほかえたてる…	（彰子）		寛弘七～八年の正月五日
	54	鶯の心にこめて…	斉信北の方		
五	55	千とせ経てすむかはきりに…	道長		寛弘八年？
	56	ながれての行末とをき…	敦成親王？	続古今・巻二十・賀・一八七五（後朱雀院御歌）	
六	57	長きよのためしにひけば…	妍子	新千載・巻二十・慶賀・二三二〇（枇杷皇太后宮） 新後拾遺・巻三・夏・二〇三（枇杷皇太后宮）	寛弘七～八年の五月五日
	58	おり立てひける菖蒲の…	（彰子）	新千載・巻二十・慶賀・二三二一（法成寺入道前摂政太政大臣） 新後拾遺・巻三・夏・二〇四（法成寺入道前摂政太政大臣）	
七	59	おり立てけふはひくにも…	頼通		寛弘六年四月下旬？
	60	菖蒲草ひけるをみれば…	隆姫女王		

第三歌群				
八	61	なれみてし花の袂を…	道長	新古今・巻十八・雑下・一七一一（法成寺入道前摂政太政大臣）
	62	馴にけるみちはうちすつる…	少将三位	
九	63	思ひしる人をしみれば…	彰子	
	64	住吉のつきせぬうらを…	藤三位繁子	
一〇	65	おもふ事いつとはいへど…	頼宗？	寛弘七～八年？
	66	ことつくるひだのたくみの…	（倫子）	
一一	67	ひろさはの池の心の…	道綱	寛弘四～八年の初夏？
	68	さはのなはかけてもしらず…	中将	
一二	69	山しろのうちにしなれば…	くもの御許	某年秋
	70	君がよとおもひなるなる…	（彰子女房）	
一三	71	置つらむ露のけしきも…	春宮居貞親王	寛弘七～八年秋
	72	今朝ばかりよそへしるらむ…	妍子	
一四	73	君が世にあまくだりける…	道綱	秋風集・巻十・神祇・六二二（皇太后宮大夫みちつな） 秋風集・巻十・神祇・六二三（法成寺入道前摂政）	寛弘七～八年頃
	74	（あめのしたをさめてきたる…）	道長		

※歌句の引用は、島原図書館蔵松平文庫本の表記により、清濁の区別をした。詠者名のうち括弧内は、本文中にない詠者名を推測したもの。特定するのに疑問がある場合は？を付した。他出文献の歌番号と括弧内の詠者名は『新編国歌大観』所収本によった。